

心をよつめる

その十六



北九州市内・近郊の寺院の僧侶にお言葉をいただくコーナーです。老後を心豊かに生きるためのヒントとなりますように・・・。

仏教思想のそこんとこ

日本人と仏教文化

日本には約7万7千もの寺院が存在します。ちなみにコンビニの全国店舗数は約5万6千。全国にある寺院の数はコンビニの数より多いことになりました。又、どなたか家族内に物故者が出られたご家庭は実感がありかと思えますが、日本では葬儀形式の約90%が仏式で執り行われます。さらに、京都の観光寺院の賑わいを見ると、日本人はさほどお寺に対して嫌悪感を持っていない訳ではなさそうです。このように何かとお寺やお坊さんと接触する機会が多い日本人ではありますが、一方で、自分の思想信条を尋ねられた時には、99%以上の日本人が「無宗教だ」と述べるでしょう。人が亡くなればひとまわずお坊さんに頼むし、京都などのお寺に行くとき気が休まるけれども、仏

教思想は全く信頼してないし、信頼するつもりもない、これが今の日本人の正直なところかもしれません。そんな皆様のために、今回は仏教思想の根幹となる「ものの見方」について、触りの部分のみお話をいたします。

人間の感情と「不満足」

歴史家のユヴァル・ノア・ハラリは、世界的ベストセラー『サピエンス全史』で仏教について、以下のように言及しています。

「私たちの感情は、海の波のように一刻一刻と変化する、つかの間の心の揺らぎに過ぎない。五分前に喜びや人生の意義を感じていても、今はそうした感情は消え去り、悲しくなって意気消沈しているかもしれない」

「仏教によれば、悲しみの根源は苦痛



浄土真宗本願寺派
極楽寺 副住職
麻生 至遠さん

「お寺は仏教の教えを誰でも身近に感じる事が出来る場所です。いつでもお越しください。」



極楽寺
北九州市若松区本町 3-8-3
TEL 093-761-2809

の感情でも、悲しみの感情でもなければ、無意味の感情でさえないという。むしろ苦しみの真の根源は、束の間の感情をこのように果てしなく、空しく求め続けるということなのだ」

ハラリが解説するように、私たちの感情は刹那的に絶えず変化していくのです。病める感情も健やかなる感情も一瞬にして消え去り、何らかの事物に執着をしていても、時間が経過すると別のものに執着をしてしまう、それが私たちの姿です。

お通夜やご法事のお説教で、お坊さんが「生老病死みな苦である」と述べているのを聞かれたことがあるでしょう。仏教では、「生きることは苦しみに満ちたものである」と考えます。この場合の「苦しみ」とは、単純に身体的・物理的な意味での【痛み】ではなく、【不満足】という意味合いです。つまり、「生老病死みな苦である」との教説は、「人間は人生に満足することは決してないものだ。なにかに満足したと思っても、

すぐに飽き、永遠の不満足を繰り返すしかない」という意味内容になります。上記ハラリの言明は、仏教思想の要諦を精確に記述しています。

仏教のリアル

世俗化が進行した現代では、そうした束の間の喜びを過剰に増幅させた言説に出会うことがよくあるでしょう。「人生一度きり。楽しまなきゃ損」「人生は60から」などの無根拠な言い回しに慣れた現代人にとって、そんな人生の楽しみなど束の間の喜びに過ぎない、と一刀両断する仏教の教えは受け入れがたいのかもしれませんが、実際、人生楽しくてしょうがない、などと考える人は仏教思想には向いてません。ただし、加齢による心身の衰えや、思い通りにいかない他者や偶然に振り回されがちな人間にとっては、仏教の教えはリアルな響きを持つものとして、きつと心に響いてくるはずですよ。